

『 学びに思う 』

現在の学習指導要領（小学校は令和2年度、中学校は令和3年度より全面実施）においては、学校現場には「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の取組を求めています。

この背景には、今、そして、これからの社会の在り方に起因すると捉えています。折に触れて、よく言われていますが、「変化の激しい、予測不能な社会」を、子ども達は生きていくことになります。将来の備えは大事なことは十分にわかっていますが、何とも不安で希望を持ってないとても厳しい社会に、子ども達は立ち向かっていかなければならないのです。こんな大変な社会や時代だからこそ、主体的に考えより良い対応ができる資質・能力、そして、生涯自ら学び続ける力を育てることが大事なのだとの考えに基づいているものと推測しています。

道教委の資料では「主体的・対話的で深い学び」のイメージを概ね次のように説明しています。

- 1 児童生徒に必要な資質・能力を育むため、学びの質に着目し、授業改善の取組を活性化していくための視点。
- 2 日本の学校では、児童生徒に求められる資質・能力の育成を目指した授業改善は、すでに優れた多くの実践成果が積み重ねられているので、これまでの蓄積された実践を否定するものではないし、全く異なる指導方法を導入するわけではない。
- 3 各教科の授業の質を高める→学習活動の質を向上させることが大切。
- 4 単元や題材などの内容や時間のまとまりの中で、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるのかを明らかにする。
- 5 深い学びの鍵として各教科で示された「見方・考え方」を働かせた授業を行う。
- 6 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの視点は、学びの本質として重要な点を異なる側面から捉えたもの。学びの過程を通して、それぞれ相互に影響し合い、一体として実現されるよう授業改善を図ることが大切。

他にも、それぞれの学びにおける児童生徒の姿についての説明もありますが、かなりの情報量になりますので今回は触れません。

以上の「主体的・対話的で深い学び」についての説明を、私なりに凝縮してみますと、
A：これまで学校で実践されてきた授業の質を向上させる視点であること。B：どういう方向で授業の質を高めるかということ、これからの時代に求められる資質・能力を育てるためだということ。C：「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」が、学びの過程を通して、相互に作用し合い、一体として実現されることが大事。これらあたりが肝になりそうですし、何となく「ああ、そういうことね」と、分かったつもりにはなるのですが、大事なのは、「具体的に何をするのか」です。

では、「主体的・対話的で深い学び」という視点で日常の授業の質を向上させるために、どのような具体的な取組が必要かということに触れます。まず、「第1段階としてどのようなことが必要か」について述べます。ここからは、私見です。「そういう考えもありますね」という広い心で読んで頂ければ有難いです。

「主体的な学び」は、子どもが、解決すべき課題に興味・関心を抱かせることが最低条件です。「なぜ？」や「驚き」を生み、「なぜそうなるの?」「初めてのことだけど、何とかなりそう!」など、課題解決への意欲を持たせるようにします。子ども一人一人が、自分事として学習に参加します。一般的に、子どもの視覚に訴えるような教材が効果的（例：比べてその違いが一目でわかる）と言われています。私が教員の頃は手作りでそれなりの時間がかかりましたが、今はICTの活用でかなり効率的に準備ができます。

「対話的な学び」は、まずは、教師と子どもとの間での適切かつ良質なコミュニケーションが成立することが基本です。吟味された発問により思考を促します。次に、子ども同士の対話です。形態は、ペア、グループ、全体。目的は、他者の考えを聴き、自分の考えと比べて、共通点や違いを判別し、自分と異なる考えの良さ及び足りないところなどについて考えます。この営みにより、自分の考えにより自信を持ったり、違いを受け入れて修正したりし、考えが磨かれます。

子ども同士の対話で留意すべきは、形式的にやっては意味がないということです。まずは、交流する前に、自分の考えをそれなりに（できればちゃんと）持っていることが前提です。そのため「主体的な学び」なのです。次に、他者の考えを聴くときの態度です。少なくとも、「共感」と「質問」ができるように育てておきます。「そうそう。私もそう思う」とか「〇〇が良くわからないから、もう少し詳しく説明して」とか「〇〇とは、どういうこと?」などです。加えて、肯定的な表情やしぐさでもできればなお良いです。これらの態度は、発達段階に応じて意図的・段階的に育てていくことが大事です。

「でもさ」「だってさ」「ほー」「なるほど」「似てるね」「近いね」などの言葉が活発に行き交う状況が生じると、子ども達の頭はフル回転状態になり、質の高い思考がなされていると押さえています。

「深い学び」は、「主体的な学び」と「対話的な学び」を通した中で実はすでに生まれてきていると思っています。つまり、それらを通してたどり着いた課題解決の「まとめ」には、新たなものの見方が含まれているからです。「深い学び」の第1歩は、見方の視点が増えていることだと捉えています。そして、新たに獲得した視点を活用して、いわゆる「応用問題」に取り組み、その視点の有効性を実感します。

とりあえず、以上のような学習が日常的に実践されることが大事なかと考えます。

最後に、授業が成立するためには、最低でも、教師と子どもとの間に良好な人間関係が形成されていなければなりません。そして、子ども同士の関係が良好であれば、学びに活気や深まりや広がりが生まれます。より良い人間関係作りが、質の高い学びにつながります。